特集

笹に願いを――

内子町の夏の風物詩「内子笹まつり」。商店街の通りには大きく色鮮やかな笹飾りが飾られ、多くの人を楽しませています。笹踊りコンクールや町中アート「幻灯」なども行われ、町が一段と華やぐときです。

この祭りは、有志による「笹まつり実行委員会」が運営しています。ここ数年は資金不足や担い手不足で運営が厳しく、継続することが大きな負担となっています。「内子町を代表する祭りだから」「子どもたちが喜ぶから」――。継続する理由はそれぞれですが、自治会や地域の人たちの力を借りながら、なんとか続いているのが現状です。

さまざまな課題を抱えながら、笹まつりの舞台裏を支える人たち――。大変と言いながらも、来た人たちの喜ぶ顔を見ると、また来年も頑張ろうという気持ちになるそうです。

そんな人たちの姿を思いながら、今年は笹まつりに足を運んでみませんか。

揺れる笹まつり

内子町を代表する大きな祭りに成長した「内子笹まつり」。大きな課題が山積し、継続を危ぶむ声も聞こえてきます。伝統の祭りを続ける難しさ。あなたは何を考えますか――。

昭和47年頃の笹まつり

●内子笹まつりの歴史

内子笹まつりの起源は、八幡神社の祭礼行事といわれています。現在の笹飾りになったのは昭和32年から。商工会青年部が、商いの繁栄と感謝の意を込めて始めました。その年から開催期日を8月6～8日と定めたそうです。内子町観光協会が昭和44年に設立されてからは、同協会が一大イベントとして「内子笹まつり」に取り組み、笹飾りは年ごとに立派になりました。笹踊りも盛大に行われるようになり、「愛媛の祭り100選」に選ばれる大きな祭りに成長しました。

●転換期

笹まつりが大きな転換期を迎えたのは、3町が合併した平成17年から。小田地区の「火祭り」や「灯籠まつり」のように、住民主体の祭りにすることを目的に、観光協会から実行委員会に運営が移行され、完全に民営化されました。合併して10年、当時からの規模を維持してきましたが、大きくなりすぎた祭りは、住民にとって大きな負担となっていました。

●直面する課題

実行委員会に移行してからは、町からの補助金も少なくなり、スポンサー料も減ったため赤字運営が続いています。また笹飾りを作る商店が減ったため、飾りのない「歯抜け状態」になっている箇所があり、どのように対応するか議論が続いています。そして最大の課題は、担い手不足。実行委員の人数は10年前に比べると半数近くに減りました。これ以上減ってしまうと、祭りの存続自体が難しくなると関係者は言います。

●祭りを継承するために

笹まつり実行委員会が25年に実施したアンケートには、さまざまな意見が寄せられました。皆さんの意見を参考に、そして地域の伝統行事や伝統芸能などの現状を顧みながら、祭りや文化を継承するためには何が必要なのか、何ができるかを、改めて考える必要があるようです。

町の人の意見

（25年度笹まつり実行委員会アンケートからの抜粋）

- ▶3日目が寂しすぎるので、3日目をする意味がないのでは
- ▶誰もが関われる祭りなので、共に汗を流したい
- ▶3日間の通行止めは営業に支障を来す
- ▶商店街から離れているので、関心が薄い
- ▶今まで受け継がれた祭りをだから、どんな形でも継続しなければならない
- ▶子どもたちのことを思うと縮小してでも続けてほしい
- ▶1度やめると、戻すのは大変。形を変えてでも続けるべき
- ▶行政の協力が必要
- ▶子どもたちが喜んで走りまわる様子を見ると、うれしくなる
- ▶祭りの由来や意味、目的などを整理し、みんなで話合うことが重要
- ▶住民の協力を得られないのなら、休止を考えた方がいい
- ▶体力がなくなってきて、手伝いたいけれど手伝えない

笹まつり実行委員会
実行委員長
森脇　三徳（みつのり）さん
＝上町＝

笹まつりは内子町民みんなの祭り 継承のため少しずつ力を貸してほしい

笹まつりは資金不足や担い手不足などの課題があります。でも私がそれ以上に心配しているのは、主催者側の人たちが負担を感じていることです。笹まつりが観光イベントとして定着したことで、少し背伸びをしすぎたことが負担感につながっているのかもしれません。

本来の祭りは自分たちが楽しむもの。祭りに携わった人が楽しく、生き生きしていると、訪れた人も楽しく感じると思います。さまざまな課題はありますが、少しずつ形を変えながら自分たちの身の丈にあった祭りにして、私たち自身が楽しむことが大切かもしれません。

笹まつりは有志による実行委員会が運営しています。しかし実情は、内子まちづくり商店街協同組合の組合員で行っています。実働人数も少ないので、運営は本当に厳しいです。内子町民みんなの祭りとして、誰もが参加できる組織のあり方も考えなければなりません。

今年は内子高校生が、笹まつりの準備を手伝ってくれました。去年の飾りの花紙をとる作業ですが、少人数ですると大変な作業です。非常に助かりましたし、少しでも祭りに関わりたいという気持ちがうれしかったです。笹飾りを作ること、笹を立てること、ゴミを拾うこと――。小さなことでもいいので参加して、みんなで祭りを成功させたという達成感・充実感を感じたいですね。

みんなが子どもの頃に感じていた笹まつりの楽しさ、今の子どもたちが喜ぶ姿――。笹まつりが内子町民みんなの祭りとして愛され、来る側も迎える側も楽しめる祭りとして、これからもずっと引き継がれていくことを願います。

Pickup!

内子高校が地域文化を学ぶため 笹まつり準備のお手伝い

内子高校の1年生は6月21日、総合学習の時間を利用して、笹まつりの準備の手伝いをしました。地域の文化を学ぶことを目的に、今回初めて行われます。大洲市から通う大藤千華子（ちかこ）さんは「お手伝いをして、小さい時に見たきれいな笹飾りのことを思い出しました。今年はぜひ見に行きたい」と話していました。

あっという間に集まった大量の花紙

古い飾りから花紙をとる作業

舞台裏を支える人たち

25年９月に、笹まつりの「人」にスポットを当てた企画展を開いた山岡姫香（ひめか）さん。
彼女の協力で、祭りの舞台裏を支える人たちの姿を紹介します――。

子どもたちにも知ってほしい、舞台裏。その願い。

さまざまな課題に揺れる笹まつりですが、次の世代に継承しようと力を注ぐ人たちもいます。

笹まつりのアンケートに答えた人の中には、「高齢になり手伝いたいけど、手伝えない」「商工会青年部など若い世代に感謝している」「祭りを維持するのは大変だけど、頑張ってほしい」というような意見もありました。笹まつりの文化を継承するため、これまで頑張ってきた先輩たちの言葉だと思います。

仕事をしながらの準備や祭り当日の運営は、本当に大変です。それでも楽しみにしている人たちのために、内子町の元気を伝えるために、祭りの舞台裏を支える人たちの姿――。

祭りを楽しんでいる子どもたちが、きっとこの町を大切に思って、地域の文化を次の世代につなげてくれる。そう信じている人たちが、代々受け継ぐ姿なのかもしれません。

10

9

8

3

2

1

12

11

8、9_笹飾りを上げる作業。雨が降ると飾りが壊れるので、ビニールをかける。急な雨は大変　10_滑車にかけたロープを引っ張って、飾りを上げ下げする　11_人気の幻灯。クレーンの上で実行委員のメンバーが作業中　12_笹踊りのときは、通行者の誘導も

5

4

1_笹飾りの骨組み。この骨組みに花紙を付けて、きれいに飾る　2_制作途中の飾りをつるす足場。軽トラックは祭りで大活躍　3_切り出してきた大量の竹。商店街中に配る　4、5_長い竹を大人数で慎重に運ぶ。交通整理をしながらの作業

6_六友会の竹を上げる作業。大きな飾りのため、竹を地面に立てるのではなく、電柱などに竹を固定する　7_六友会の飾りは現地で微調整をしながら笹飾りを飾っているため、設置するだけで半日もかかる

7

6

Interview　舞台裏を支える人たちの声

商工会青年部長
酒井勝也（かつや）さん
＝内子５＝

自分が子どもの頃の笹まつりは本当に活気がありました。楽しい思い出もたくさんあります。自分たちの子どもにもいい思い出ができるよう、僕らの世代の頑張りが必要ですが、商店街の若者だけでは、人が足りません。少しだけ皆さんの力を貸してほしいです。笹祭りがなくなるときは商店街や町に元気がなくなったとき。仕事をしながらの準備は大変ですが、頑張って笹まつりを続けましょう。

六友会（ろくゆうかい）会長
檜山義夫（よしお）さん
＝内子６＝

六友会のメンバーと30年近く、一緒に笹飾りを作っています。みんなで集まっていろいろな話ができるのも、楽しみの１つです。大きな飾りなので、年とともに大変になります。毎年、祭り後の打ち上げで焼き肉を食べながら「もう、やめよう」と言っていますが、今年もまた続いています。

私たちが笹飾りをやめると、寂しくなると思うので、祭りを元気にするためにもう少し頑張ります。

山岡姫香（ひめか）さん

女子大生目線で笹まつりを表現

京都精華大学でデザインを学んでいた山岡さん。25年９月に内子笹まつりを題材にした企画展「女子大生山岡姫香は内子笹まつりで何を見たのか展」を開きました。

山岡さんは「大学の活動で内子町との縁ができた。笹祭りは飾りも素晴らしいけれど、もっと魅力があるのは祭りに関わる人たち。その魅力を伝えたくて、『人』にスポットを当てた企画展を考えた」と話します。企画展のプロデュースを山岡さん、撮影を同大学の金原由佳（ゆか）さんが担当。上の３～５番、８～10番、12番は２人からの提供写真です。

笹飾りに託す思い

武田　隆幸（たかゆき）さん
＝内子１＝

25年度の笹飾りコンテストで最優秀賞を受賞した武田隆幸（たかゆき）さん。母と妻の京子さんと3人で飾りを作っているそうです。図柄などのアイディアを京子さんが出し、それを基に隆幸さんが設計図を書くとのこと。飾ったときに絵がきれいに見えるよう、納得がいくまで書き直す、こだわりの部分です。制作は5月から。仕事をしながら約3カ月間、花を開く作業などを黙々と続けます。

武田さんたちには2つの楽しみがあります。1つは笹飾りを上げたときのお客さんの反応。特におじいちゃん、おばあちゃんが喜んでくれることが「心が癒されて、頑張って良かった」と思えるそうです。もう1つは子どもたちが毎年、笹飾りを上げる作業を手伝いに、遠くから帰ってきてくれること。4月に東京で就職が決まった息子さんに隆幸さんは、「店を継がなくても、祭りのときには帰ってきてほしい。そして将来的には内子に住んでほしい」と言います。

「子どもたちも笹まつりを楽しみにしている。なくなったら寂しい。笹まつりがあるから、子どもたちが帰ってくるきっかけになっている」と笹まつりの意味を考えます。

最近では全部の飾りを手作りする人は減りました。京子さんは「やめたくなることもあるけれど、たくさんの人の喜ぶ顔がやる気につながるし、祭りの思い出は家族の絆」と語ります。

さまざまな願いはありますが、ただ単純に「来る人に楽しんでほしい――」。その願いを笹飾りに託しています。

笹に願いを――

「第57回内子笹まつり」は、8月6～8日の3日間。多くの人の思いが詰まった祭りです。今年はみんなで参加して、一緒に祭りを盛り上げてみませんか――。

武田さんが作った笹飾り

楽しむ子どもの姿

光りの笹飾り

笹祭り実行委員会からのお知らせ

◎笹まつり期間のごみ収集場所の変更と交通規制区域のお知らせ

ご協力をお願いします。

【ごみに関する問い合わせ】　環境政策室　☎０８９３（４４）６１５９